

「ガネフォ」を知って

テレビマンユニオン

田 中 由 美

(ガネフォ会)

私が「ガネフォ」について知ることになったのは、浦辺 登さんからお話をうかがったのがはじまりです。その後、浦辺さんの著書『アジア独立と東京五輪：「ガネフォ」とアジア主義』を拝読して、テレビ番組にできないかと思いました。1964年東京オリンピックの前年に、インドネシアでこのような競技大会があったことを全く知らなかったからです。浦辺さんに水球チームのことも教えて頂き、村上順三さんにお会いして、「ガネフォ会」に参加させて頂き、皆様のお話をうかがわせて頂くようになりました。

当時の映像や写真、新聞記事の数々を拝見して、オリンピックに匹敵するほどの規模の競技大会だったということに、まず驚きました。そして、水球チームの皆様一人一人が、ガネフォに対して強烈な思い出を持ち、そして、ガネフォへの参加は、その後の人生に大きく影響を及ぼす経験だったことがよくわかり、とても印象的でした。

拝見して一番心に残った品物は、当時、選手の皆様が書いたメモです。銀メダルをとったガネフォからの帰りの飛行機の中で、一人ずつ書いたという今後の決意や抱負。日本水泳連盟の下した自分たちの立場が、今後どうなるかわからない中で、後輩の指導等で、日本の水球競技に貢献したいという熱い思いと、いつまでも変わらないチームの強い団結を誓ったものでした。当時20代の皆様が、どれほど大きな決意を持ち、悔しさや不安を感じながらも、強い友情で結ばれていたことがよくわかり、読んでいて胸が熱くなりました。また、当時の誓い通りに、皆様がその後の人生を力強く歩んでこられて、50年以上にわたり固い友情が今でも保たれ、年に1回集まっていらっしゃることにも大変感銘を受けました。ガネフォ会に参加させて頂きまして、大変光栄に思います。

昨年10月に、インドネシアで開催されたアジアパラ大会を取材撮影するために、ジャカルタを訪れました。ガネフォの写真で見覚えのある、当時と変わらない競技場や、ホテルや広場を眺めながら、皆様のことを思い出し、番組にしたいという気持ちが再び強く湧いてきました。

私は、学生時代に、インドネシア語の授業を半年だけ受けたことがあり、インドネシアはとても興味のある国でした。しかし今まで、仕事でも個人でも訪れるチャンスがなく、入社28年目にして、はじめて仕事で行く機会に恵まれました。また外務省に勤める友人が、数年前までジャカルタに滞在していたと知り、多くの人脈を持っているようなので（なかなかガネフォのことを知っている人はいないようですが）、次回はぜひガネフォの取材で、ジャカルタに行きたいと願っています。

そもそも、ガネフォについて教えて頂きました浦辺さんとお知り合いになったのも、ガネフォの日本選手団長だった頭山立國さんのお祖父さま、頭山満さんと交流のあった人物を取材したことがきっかけでした。このように、様々なご縁を感じながら、ガネフォ会に参加させて頂いております。いつも皆様に、温かいお言葉をかけて頂きまして、本当に有難うございます。皆様がガネフォに参加され、関わり、日本とインドネシア、そしてアジア諸国との架け橋になられた事実を、これからも折に触れ、多くの人に伝えていきたいと思っております。

（2018年に訪れたジャカルタの風景写真）



国立競技場（ブンカルノ競技場）



2018 アジアパラ大会



ホテルインドネシア



ホテルインドネシア前広場